

志賀高原の歴史2-江戸から明治・大正

江戸時代の後期から明治にかけ、志賀高原では湯治客を対象とした宿3軒(発哺温泉・熊の湯温泉)や草津街道を行き来する人々のための茶屋1軒(杓打の茶屋)があり、夏季のみ営業をしていました。

明治44年、新潟県高田の陸軍師団でオーストリアの軍事使節レルヒ少佐により、スキー指導が行われました。日本で最初のスキーの始まりです。高田をかわきりに旭川等国内各地で講習会が開催され、この講習会に参加した軍人や新聞ニュースでスキーが全国的に知られるようになりました。そして講習生の軍人から教わった中学校の生徒と先生は地元、特に山を擁す地域に持ち帰り、地元の学校や子供達を中心にスキーが広まりました。

翌45年には飯山中学(現飯山北高校)にスキー部が創設され、大正2年には日本スキー倶楽部主催により第1回全国スキー大会が開催される等、スキーは軍人及び雪国に留まらず、大正2年の法政大学の山スキー合宿等、本格的にスキーをスポーツ及びレジャーとして楽しむ人達が都会を中心に全国的に増えました。

志賀高原における最初のスキーは、大正2年のドイツ人キンメル夫妻により始まりました。志賀高原の麓上林温泉に宿泊し、近くの畑や斜面・十二沢でオーストリア式一本杖スキーを持参してのものでした。これを見た地元の子供達の驚きは大きく、その楽しさに刺激され、翌年には飯山のスキー店にスキーを買いに行く者や村の鍛冶屋に頼むなど急速に普及致しました。

スキーの普及は志賀高原に大きな影響を与えました。従来夏季のみの営業であった湯治宿や茶店が冬にも営業する所が現れ、以前の湯治と避暑地から冬のスキー客の受け入れも始める等、年間を通しての旅館・茶屋営業が始まりました。

大正9年には若山牧水が草津より渋峠を越えて渋温泉に宿泊(渋峠、潤満滝、渋温泉大湯の3ヶ所に牧水紀行文の碑があります)するなど、志賀高原は次第に都会の人を中心に知られる所となりましたが、特にスキー場としての人気は広まり、地元でも信州山ノ内スキークラブ(現志賀高原スキークラブ)が設立されました。当時のスキーは以前的一本杖スキーから2本杖スキー(大正4年北大スキー部で2本杖スキー教程が発表された)に代わり急速に普及して行きました。この頃のスキーはツアースキーで、山から山又温泉から山越えでの温泉へと巡るスキーで、大正10年には平穏山岳会山案内人組合も発足致しました。

又、スキーの普及は地元の交通網開発にも大きな影響を及ぼしました。バスは大正5年には中野～渋温泉が開通していましたが、電車は大正11年に国鉄屋代駅～須坂が河東鉄道(現長野電鉄)により開通、そして翌12年には須坂～信州中野が開通。大正15年の村山鉄橋竣工に伴い昭和2年の長野～湯田中間の開通と輸送量も大幅にアップ致しました。

志賀高原は従来湯治客の泊めたり、材木の伐採や炭焼き、箸作り、山菜獲り等の山稼ぎ人の山から観光地へと産業が変化し、経済的にも躍進する所となり、昭和に入ってからその流れは一層顕著となって参りました。

単なる山稼ぎの地から経済的価値が高まった地、志賀高原。地元民はこの大なる財産を財団法人によって法的に所有とその権利を明確にすることとなりました。(前号での和合会の設立です) (次号へ続く)



潤満滝の炭焼き小屋(上) 山稼ぎ人(右)

**山の暮らし**  
炭焼き・箸作り・竹製品

Life in the mountains :  
making of charcoal, chopsticks, and bamboo craft

志賀山や岩菅山を中心とする山々にわけて、厳しい自然の中でくらす「山稼人」と呼ばれた人達は、山の恵みを利用する一方、自然と共生するための「掟」を持っていました。たとえば、冬仕事の箸作りの原料となるシラビソやクロベの乱伐を防ぐため、伐採はすべて申告制で、伐採地からふもとへの運搬はその家族労働に限るといったもの、あるいは、自家用以外の山菜の採取も禁止されていました。山仕事に使った手垢のついたいろいろな道具に、むかしの人々のくらしの知恵が残されています。

**炭焼き**

**箸作り**

炭焼きガマについて(上)

潤満滝の牧水紀行文の碑(右)

杓打公苑(杓打の茶屋跡)の草津道について(下)



一の瀬の奥、中小屋の竹切り小屋(上) 一本杖と初期のスキー、ブーツ(右)

